

言語学史上における
シーボルト先生
新村出

国立国会図書館

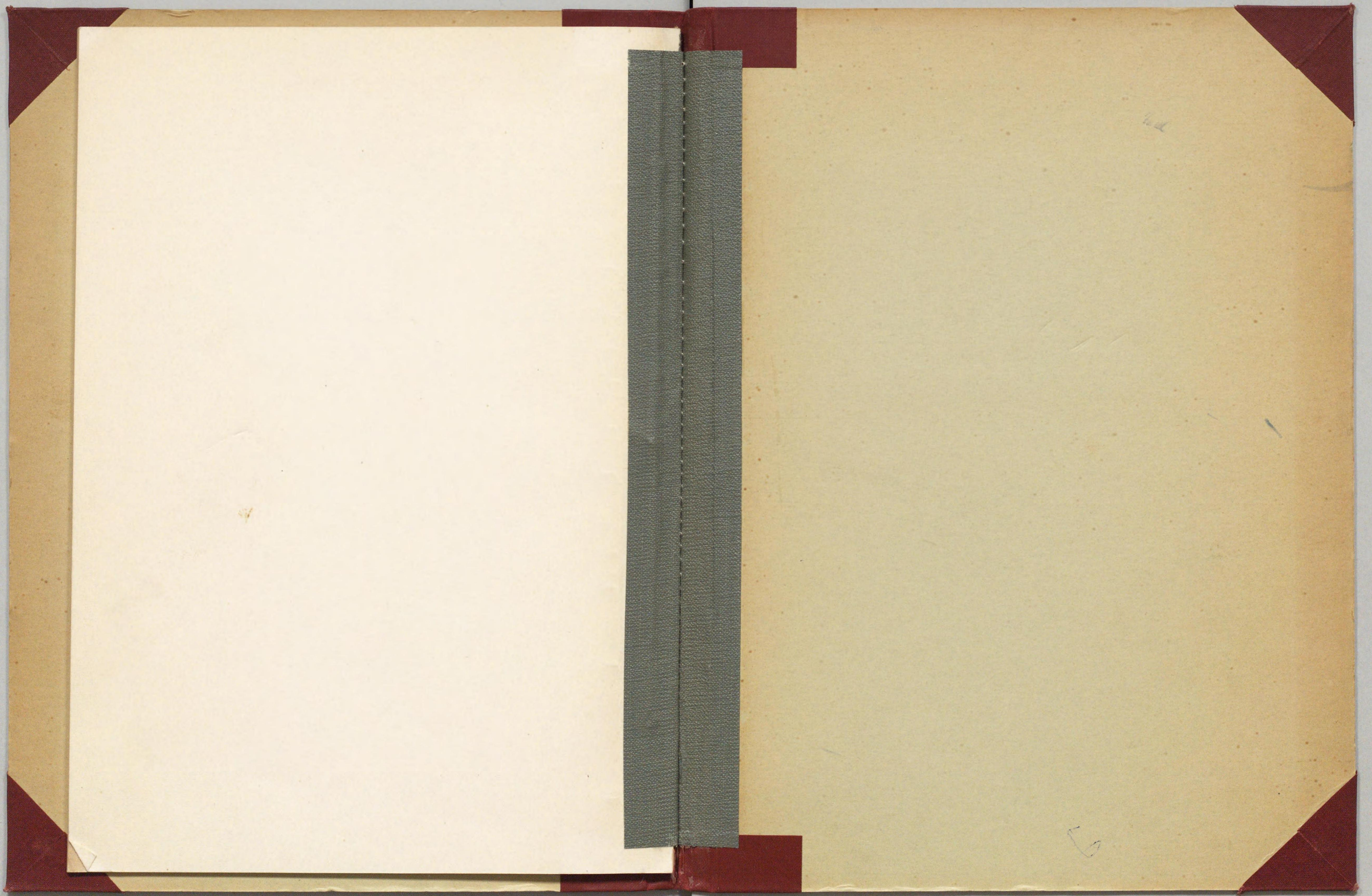
289.3
cS57S2g



00337670

289.3
cS57S2g





[Blank page with faint markings]

[Blank page with faint markings]

池田先生

著者 池田

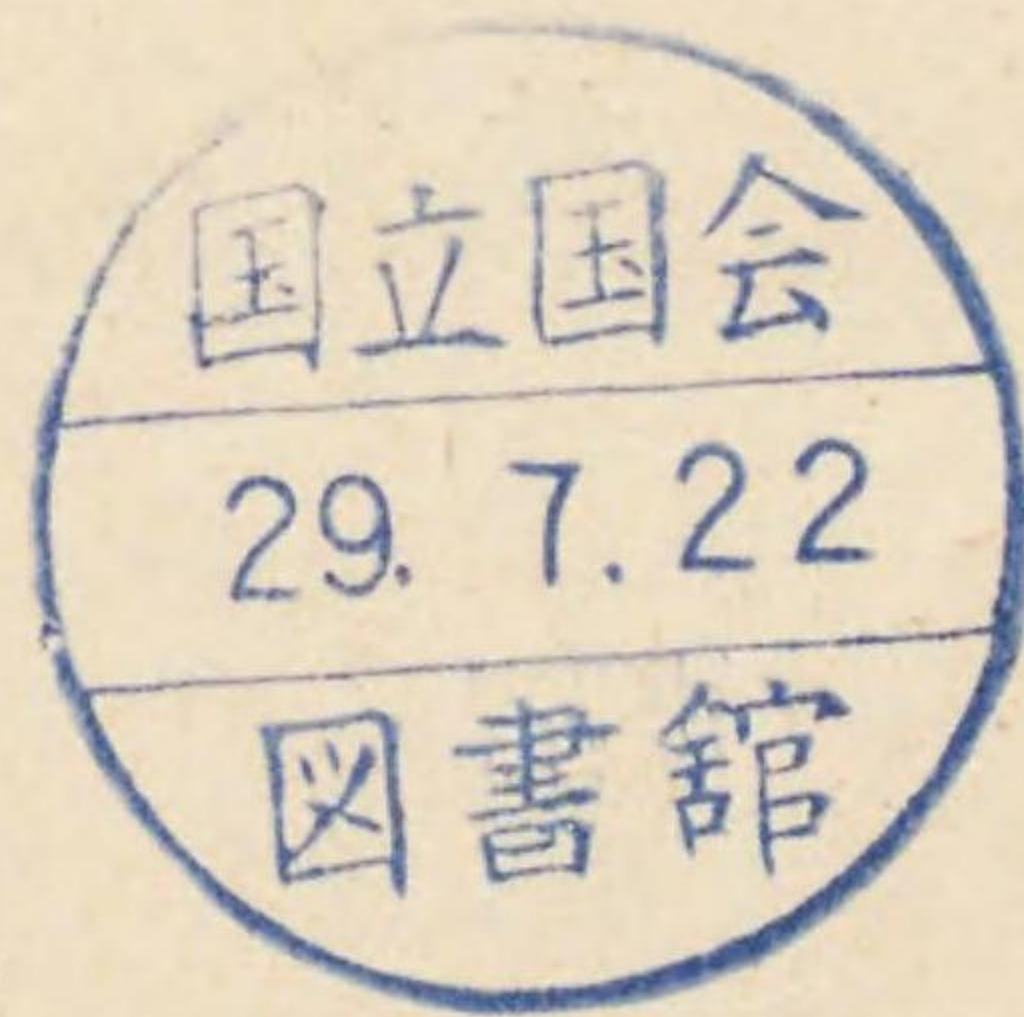
昭和十三年六月

日獨文化協會編「シーボルト研究」抜刷（昭和十三年六月）

言語學史上におけるシーボルト先生
新 村 出

言語學史上におけるシーボルト先生
新
村
出

289.3
cS57S29



337670

シーボルト先生の言語學に關する功績については、故吳秀三博士の大著『シーボルト先生』第六章なる「先生の研究成績の概要」第三節に人類學また人種説と標題した六〇〇頁乃至六〇八頁の中に大要を紹介してはあり、且つ六〇六及六〇七の二頁にわたつては特に言語學といふ見出しを附けて一通りの記載がある。然しながら、記述や、物足りない所がないでもない。而して其の中の參考資料として註記された條に、「金田一京助『アイヌの研究』附録新村出論文」とあるのは、金田一博士の著述『アイヌの研究』の附録と、新村出の論文との二つを擧げたものではないかと思ふが、二者が混一されてゐるらしいのは如何であらう。私の論文といふのは、或は未發表未定稿の抄本ではなかつたかと思ふけれども、今は何れの抄物であつたか明かにしがたい。吳博士の二三回の來訪及び何度かの來信のをりに、自分の抄本を信示したこともあつたにはあつたし、現に六〇七頁の第三第四兩行の短文の如きも、これは確かに自分の指示に由られたものと推察される。ともかくも自分の立場からして、その部分に幾何かの補充を施しておきたいと考へたことは、永年のことであつた。それに加へて、實は私の執筆の遅いのは昨今に始まつたのでなく隨分當事者の御迷惑を來たすことを恐縮に存する次第であるが、顧みれば大正十三年即西曆一九二四年の夏シーボルト先生東渡百年にあつて記念講演と記念出版とが長崎の地にあつた際、主として言語學史上より見た先生の功績を稱へた講演を試みたのであるが、今尙ほそれを筆録することを怠つて、既に十三年を経てしまつた。幸にも日獨文化協會が今般シーボルト先生の功業追遠録を刊行されるについて、寛厚なる態度を以て拙稿を徵せられ自分が補訂を試みる機會

を與へられたのは、私の深謝に堪へざる所である。

シーボルトの言語學史上の功績、むしろ歐洲における日本研究上の功績といふ方がよろしからうが、それらの點に關しては、言語學者のがからは、既に一八六九年即明治二年に、獨逸の十九世紀中期の梵語學者として盛名ありしテオドトル・ベンファイ Theodor Benfey が、その名著『言語學史・附獨逸東洋文獻學史』の第十五節を成せる『日本語』の條下、七五四頁乃至七五七頁において略叙し、又第十八節中アイヌ語學の條下七七一至七七二頁の中に見えず、唯朝鮮語學の條下七七二頁の中に記載してあるにとゞまる。然しながらこれ亦至極簡単に過ぎてをり、私たちの立場からは、いつかは十分増補を加へなければならぬと思つてゐた。アイヌ語學の條中に、奥國のプッツマイエル August Pfitzmaier を擧げてシーボルトの名を逸したのは、大なる失當とせねばならぬ。

シーボルト安政六年一八五九年再渡の際における將來目錄は、長崎の出島版にかゝり、文久二年一八六二年の刊行である。この佛文を以て編纂されたシーボルト將來の文庫の書目は、幕末における西洋學術渡來史料として偉觀をなすものであるが、その中の東洋學及言語學關係の典籍は、五四九號より六五四號にわたつて凡一〇六部を算し、博言集もあれば比較言語學書もあり、印度語・波斯語より南洋語さては西藏語・日本語・支那語などは勿論のこと、滿洲語・蒙古語・土耳古語・ヤクト語の如きウラルアルタイ系の諸民族語、アイヌ語學、且つ遙かに濠洲や墨國の土語にまでも及んでゐる。アーデルング Adelung の大著たる『世界言語集』、ボップ Bopp の世界的名著たる『印歐諸言語比較文典』、クラブロート Klapproth の劃期的偉著たる『亞細亞博言集』、ボルレル Bolter の名篇とされる『日本語ウラルアルタイ語系所屬論』、これら十九世紀の初期中期における言語學上の諸名著がシーボルト文庫の中に著

録されてゐるのは、われらの如き専門學徒を如何ばかり驚嘆せしめたことか。幸にもこの將來目錄は日獨文化協會によつて複製されて、何人も容易に接することが出来るやうになつた。すべてこれら百有餘部の言語學書は、その他の六百有餘の典籍と共に、その行方が如何になつたか、私自身未だ極めないでゐるが、聞くが如くれば、これらシーボルト舶載書の少くとも或部分は、本邦の或る處に潜在してゐると云ふことである。但しシーボルト再渡滯留の期間には不幸にして三年に満たない短かさであつて、而も驥足を伸ばすことが出来ずに空しく歸國するの止むを得ざる徑路をとつたので、當時の長崎及江戸の學界に在つては、それらの言語學書などは利用される餘地がなかつたのではあるまいかと思はれる。若しそれらの言語學書が本邦の新進學徒によつて有効に閱讀されてゐたならば、比較言語學の方法論なり學理なりは、明治二十年代において東京の新帝國大學の文科大學のチェンバレン教授に由る指導や、それ以前に紹介されたと見られるマクス・ミューラー Max Müller 乃至ホイットニー Whitney の英米系の言語學說の啓發や、それらを待たずして、約二十年ほど前に、その種子を本邦の學士におろしてゐた筈であつた。

シーボルトの初渡は、文政六年即一八二三年のことであつて、在留六年半未滿にして、文政十三年改元して天保元年の一八三〇年に退去し、爾來三十年を経て、安政六年即一八五九年に前記の文庫を將來して再來したのであつた。初渡の時の年齢は日本流の算へ方で二十八歳、退去の時が三十五歳、而して再渡の時には六十四歳といふ老齡であつて、文久二年一八六二年六十七歳で歸國した。慶應二年一八六六年七十一歳を以てミュンヘンに歿する年に、この老學者が當年二十七歳の青年文士ドーデーと邂逅した始末は、藝苑の佳話となつてゐる。

さてシーボルトが初度退去の一八三〇年より再度來朝の一八五九年に及ぶ三十年間の十九世紀の中期は、言語學の

興隆期であつて、殊に印歐比較言語學を中樞として發達した新言語學の一應の完成期であつた。而してそれは復興獨逸國を中心として進んだのであつた。従つて智識の吸収に飽く所なき新進日本の青年學徒の萬一の期待にもそふやうに、シーボルトが主として獨逸言語學の標準書をも一通り具へて來朝したのは、その準備の周到なるを認めてよからうし、むろん先以て自身が研鑽の資料に供する用意の周密なるを察せねばならぬ。惜むらくは時運利あらずして是等有益なる新著どもの活用される機を逸して徒らにこの書目が書誌學上の珍籍となるにとどまつたことである。

十九世紀の初期三十年間すなはちシーボルト初度日本退去の年頃までは、比較言語學また東洋學が、その本國獨逸に於て新に勃興し始めた時期にあたるのである。理論言語學はいさゝか後れ氣味であつたが、この時期に方つて比較言語學はフランツ・ポップにより、歴史言語學はヤコブ・グリム Jacob Grimm により、それぞれ確固たる基礎をおかれた。理論言語學の根柢が、ウィルヘルム・フォン・フンボルト Wilhelm von Humboldt によつて培養されつゝあつたのも、此の時代であつたのであるが、但その業績の結集が、フンボルトが一八三五年天保六年逝去の直後に結集されたといふに過ぎない。印度學、といふよりは寧ろ梵語梵文學といふ方が適當であらうが、斯學間が獨逸では英國および佛國からは一步おくれけて開けたのは、同じく此の三十年間のうち後の方の二十年間と申してさしつかへない。支那學の研究といひ、滿洲言語學の創業といひ、獨逸又は獨逸人にあつては、一八一〇年代乃至一八二〇年代が注目されねばならなかつた。日本語學の進運も要するにこれらの東洋學の興隆に伴はざるを得なかつた。それは自然の趨勢といふべきである。

シーボルトのヴェルツブルグ大學入學の一八一五年即文化十二年其二十歳の時よりDM學位受領の一八二五年即文政三年其二十五歳の時に至る六年間の學界の大觀を試みると、その入學の年には獨逸生れの而も伯林兒の東洋學者クラプロートは本年三十三歳を以て巴里に移住することになつた。その前年には、同じ専門學徒の泰斗として並稱せられた佛國のレミューザー Abel Rémusat が二十八歳にして佛蘭西學院(コレージュ・ド・フランス)の教授に任ぜられた。このレミューザーと共にシーボルトの東征に對して指導する所のあつたウィルヘルム・シュレーゲル W. Schlegel も、同年既に四十八歳、豊富なる閱歷を以て梵語學に向つたのであつた。當時は此のシュレーゲル、即ち兄シュレーゲルの梵語學に對して支援者でもあつた年少のポップは巴里遊學中であつた。程なく梵語を中心にして印歐比較文法を作る其の素地を固めつゝあつたのである。ポップの大著の先驅として其の動詞活用論が著はれたのは、シーボルトが大學入學の翌年に當る。シーボルトの修學期中、ライン河畔山水明媚の學藝都市ボンにおいて普國の新大學が設立され、そこに兄シュレーゲルが當年五十二歳その大學の教授に任ぜられて、梵語學の講座をも兼擔することとなつた。そこには愛國詩人アルントも史學を教へることとなつた様に、幾多の新人が登用された。シーボルトの東行に際して彼が植物學の嚮導者となつたネース・フォン・エーゼンベック Nees von Esenbeck の如きも、このボンの新大學の創立期の教授であつた。さて此のシュレーゲル教授は、その就任第三年より『印度文庫』Indische Bibliothek と題する梵學雜誌三卷九冊を爾後十餘年間にわたつて一八三〇年まで編輯刊行し、梵字の活字をも作り傍ら梵文學の古典の名篇を拉譯印行した。かくてシュレーゲルは一八四五年七十九歳の高齡を以てボンの地に歿するまで梵文梵語學のために、その他文學藝術の學問のために、大に盡瘁したのであつた。但し才氣識見遙に兄を凌駕した弟フリードヒ・シュレーゲルの方は、兄に先ちて梵學に志し、夙に一八〇八年、有名なる『天竺人の言語及智能』を論じた一書

を著し、比較言語學の創意を啓示する所があつたが、然し文獻學者としては、梵語學者としては、兄の方が弟よりも優秀な業績を擧げた。しかのみならず、彼は沙翁の譯者としての方が一般に廣く知られた外、そのほか外國文學の譯述者として幾多の名篇を遺してゐるのである。

このシュレーゲル兄弟、かのグリム兄弟、これら文獻學者の數々のほか、俊秀なる哲學者詩人文豪の一團によつて代表される獨逸ロマンチックの學徒は、この十九世紀初期の思想界文藝界の主潮を形作り、之を文獻の開發といふがはから觀ると、國內よりは民族的郷土的なる資料を蒐集闡明し、グリム兄弟にあつては、或はメールヘンの編輯となり、獨逸辭書の編纂となり、兄ヤコブのゲルマン文典の名著となり、國外よりは、歐亞諸國の言語文學を移入し、或は近く求めては兄シュレーゲルが沙翁の翻譯となり、或は遠く印度に探りては同シュレーゲルの梵文學となり、更に波斯に得ては、ゲーテの西東詩篇の創作となつた始末であつた。されば二十歳乃至二十五歳の南獨大學の一醫學生シーボルトが、よしやその専門が自然科学ではあつたにもせよ、このロマンチックの思潮に動かされなかつたとは思へない。シーボルトの日本研究が、一に獨逸のロマンチケルの學問精神に基いたと斷じては、少し言過ぎるであらうけれども、全然科學智識の探求心のみから出發したと考へては物足らないのではあるまいか。シーボルトの殊域探檢の勇猛心は、同代の弟アレキサンデル・フォン・フンボルトの亞米利加亞細亞の遠征のそれと、規模の大小の差は別として、雙方相通するものがあることは否定出來ぬとしても、ロマンチケルの影響が加はつてゐないとは考へられない。シーボルトより二十七歳も年長者たる弟フンボルトのウラル地方アルタイ地方さてはズンガリー方面の探檢は、その時期概ねシーボルトの日本初渡研究の時期の末に當るが、フンボルトが後年の大著『コスモス』と、シーボルトの不

朽の偉編『ニッポン』とは、これ亦廣汎さに於て深遠さに於て同様に扱はれないものの、然し此の『ニッポン』と題する一大叢編は、文理兩面に互つて『コスモス』とは全く別趣の特色を有する。シーボルトの研究の一面には、確かにロマンチケルから鼓吹された所の學藝精神の發揚を認めないわけにはゆかない。

和蘭軍醫としてのシーボルトの歐洲出發は一八二二年即文政五年であつて、發途に先ちて、ボン大學の言語學者にして亦ロマンチケルの頭領の一人ウィルヘルム・シュレーゲルや植物學者として名聲ありしネース・フォン・エーゼンベック等を尋ねて教を乞うた。巴里に入つては、東洋學者レミューザを訪問し、且つ名高き動物學者キューヴィエー G. Cuvier 等に就いて智識を求めた。殊に當年巴里に於ては、クラブロートの努力に由つて亞細亞協會が新設せられ、レミューザが會長となり、今尙ほ繼續せる『亞細亞學報』が創刊された。出發以前巴里におけるシーボルトと同國の先輩クラブロートとの學問上の交渉は如何であつたかは、今容易く知らるべくもない。クラブロートは、當年四十歳、翌年には『亞細亞博言集』の名著が出た。新進未熟のシーボルトは二十七歳。其の長崎着港は翌一八二三年(文政六年)八月のことであつた。

以上記する所の二三十年間すなはち十九世紀の初期にあたる我が文化文政年間は、本邦に在つても亦西洋學が進歩の緒に就いた時代である。東洋學の淵藪たりし巴里に於て亞細亞協會が設立されるよりも十一年前の文化八年即一八一一年、江戸幕府の天文臺内に於て、天文方兼書物奉行たる高橋景保が、蘭書翻譯局を附設して、在府の仙臺藩醫大槻玄澤を擧げ、少壯學者にして語學の才能に優れた譯官馬場貞由を長崎より徴し、爾來半世紀に近き間、天文・地理・博物・理化等の學藝を蘭書によつて翻譯すること夥多、延いては外國の交渉と國防の機務とに參し、遂に安政三年

(一八五六) 蕃書調所の組織に基礎を與へたのであつたが、その創設時代の俊才馬場貞由は、シーボルト初渡の前年、三十六歳の壯年を以て江戸に病歿して、惜哉二人の交會は起らずに了つた。江戸の蘭書翻譯局の創設者たる高橋景保と、巴里の亞細亞協會の創立者たる獨國學者クラブロートと、二人の間には類似點が見出される。探檢家的風格においては、クラブロートはむしろ同じく書物奉行近藤正齋に似た趣が多い。曠古の東洋學者クラブロートは、むしろ經營家にして學才にも富める西洋學の主導者高橋景保の方に比せらるべき所が多い。何はともあれ二者に共通な點は、而も同時代に於て滿洲語學の研鑽に意を致した事柄を特筆せねばならぬ。高橋の滿洲語學については、拙著『東方言語史叢考』に詳かにし、又小著『史傳叢考』にも要を録しておいたから、今は之を省略する。高橋はクラブロートより二歳年少で、彼が所謂シーボルト事件に因つて文政十二年(一八二九)江戸に牢死したのは、クラブロートが一八三五年巴里で客死したよりも六年早い。前者は享年四十五、後者は五十三。たゞ二人が、東西地を異にして、各滿洲語學に盡瘁して大なる業績を遺したのは、一異觀たるを失はない。たゞ不思議なのは、シーボルトが、高橋景保との交渉があれほど親密であつて、遂に高橋をして窮死せしめ自身も亦退去するの止むを得ない關係に立至りながら、高橋の滿洲語學の力を借らなかつた様に見える點である。クラブロートにシーボルト初渡の一八二三年(文政六年)に『亞細亞博言集』Asia Polyglotta の著のあつたが如く、高橋にも同年に『亞歐語鼎』五卷の稿本が存してゐる。これも奇遇とすべきが、約三十年を経た嘉永安政年間に至つて、漸く對照言語集が本邦に於て試みられたに先だつて、高橋の『亞歐語鼎』の編纂は、破天荒とすべきであらう。東西學界の時運が揆を一にして茲に至つたものと考ふべきである。されば歐洲における東洋學の進運が本邦における西洋學の發達と期を同じくし、歐米人の極東探檢の趨勢が、

日本人の國防觀念また開國機運の伸展と連關するが如きは、世界の氣勢或は東西學界の會通といふ點より觀て、興味

の甚だ深いものが存するのである。高橋景保とシーボルトとの交渉も、かういふ側よりの考察を缺いてはならない。

シーボルト滯留の六ケ年半に於て、彼が蘭醫の資格を以て甲比丹ステュルレル Schiller に隨行し江戸に參禮したのは、文政九年の一八二六年のことであつた。此年に、バタヴィア學藝協會誌第十一號六三頁至一三六頁に互つて拉丁文を以て『日本語學綱要』Epitome Linguae Japonicae の一篇を公にした。三年前長崎來航以來の日本語修學の成果であつた。譯官の助力に依つたものであるが、蘭語學の達人にて馬場佐十郎貞由と同門なる吉雄權之助永保等より得る所が多であつたと思はれる。シーボルトは翌年の一八二七年(文政十年)の十二月に至つて、出島より獨文にて日本人種論を草し巴里の亞細亞協會に向つて送つたが、その論文は、多分翌年の一八二八年(文政十一年)中に、遅くとも更に翌年の春にか、巴里に達した筈である。クラブロートはそれを接手して一八二九年の六月に亞細亞協會に於てそれを紹介して論評を試みた。それは同年六月號の同協會時報に載つてをる。その大要は既に吳博士の大著に紹介されてゐること、拙稿の首めに掲げてあるが如くである。この時には、著者シーボルトは既に昨年來出島に幽閉されてゐたのであつた。運命の數奇亦妙なりといふべきである。

クラブロートが紹介論評したシーボルトの日本人種論は、一八二七年十二月十五日附出島發信であるから、それは本朝の文政十年十月二十九日に當るが、原著者はすでに日本語と朝鮮語・蝦夷語・滿洲語・支那語との比較を試み異同を考へたが、最上徳内の蝦夷語および山丹語の智識をも利用してゐる。クラブロートは、この山丹語に關する報告の全く新奇なることを稱し、それが通古斯トングスに外ならずして滿洲語に近き方言なることを指摘してゐる。シーボルトは、

彼が既に知悉せるが如き比較言語學の研究法に則つて一應語法上の觀察をも怠らなかつたけれども、主として語彙の比較に由つた所が多かつた。クラブロートは、シーボルトの論著を批判して、未だ語根上の一致を見出すことが出来ぬことを明かにした。

朝鮮語に關しては、シーボルトは、一八二八年三月十七日以降(文政十一年)、漂流朝鮮人を長崎の對馬屋敷に尋ね、體質・風俗・言語文字を調査して、その成果を『日本』のうちに載録したのみならず、寛延三年所刊の朝鮮物語卷五中における朝鮮の國語約三百語を抄出した。然し日鮮語の深廣なる比較研究には及んでゐない。又日本語に關しては、同年長崎に於て譯官吉雄權之助・同忠次郎のほか門人轟武七郎・岡研介の補助によつて日本語彙を編し其の未定稿も存する様である。その他、後年『日本文庫』Bibliotheca Japonicaの中に收めて刊行した『和漢音釋書言字考』(合類大節用集、植島昭武編)や『新增字林玉篇』や『千字文』などの字引類があり、又朝鮮語彙たる『類合』の譯註本の刊行も同文庫中にある。別に一八四一年(天保十二年)に刊した『日本文庫及日本文學研究提要』Isagoge in Bibliothecam Japonicam et Studiorum Litterarum Japonicarum があり、同學の同郷人ホフマン所編の『日本刊本寫本書目』Catalogus Librorum et Manuscriptorum Japonicorum 中にも、語學書の門があるけれども、いづれも今は細敘するの暇がない。

朝鮮語學に關しては、前記のほか、蘭國ライデン大學圖書館の所藏にかゝるシーボルト船載の書物及び之に關連せる書物のうち、倭語類解の寫本や類合の寫本をはじめ、若干の文獻が注目される。要領は拙著『東亞語原誌』に收めた「和蘭ライデン大學訪書誌」に擧げた如くである。前述の朝鮮物語の寫本もその中に交つてゐる。シーボルトの日鮮語の比較にしても、又朝鮮語學そのものにしても、極めて淺薄なものであり、歐洲言語學界に及ぼした直接の影響といふものをも、殆ど認めかねる。然し文獻上の資料と鮮人からの直接聴取との二方面によつて、洋人としては、このがはにかけて先鞭をつけたものとせねばならぬ。二百年前に濟州島に難破した蘭船の漂客の報告書からは、語學について材料を得ることが出来なかつたし、更に遡つて南蠻宣教師の入鮮の結果からも成績が擧がつてをらぬ。わづかにクラブロートが一八三二年即天保三年に刊行した林子平の『三國通覽圖說』中の朝鮮語くらゐな第二次乃至第三次的の價值しか存しない材料のほか傳はらなかつた時代にあつては、そのクラブロートが學界に紹介したよりも少し前に、シーボルトが直接採集した鮮語資料は、たしかに進歩した資料であつたと考ふべきである。

之に反して、蝦夷語學、むしろアイヌ語學といふべきであるが、當時の日本の學問界にあつては、北邊多事な時勢であつただけ、それだけアイヌ語學の方が新興語學であつたわけだから、シーボルトの採訪したアイヌ學文獻及び採録したアイヌ語の方が、その價值と有益さとに於て朝鮮語資料を遙に凌駕してゐる筈である。奥國のプッツマイエルのアイヌ語學も一にシーボルトに負うてゐることは多説を要せぬ。最上徳内の直接教示、また二人の親交、共に吳博士の著述にも詳敘されてゐるし、書目は私のライデン大學訪書志にも一部を紹介してあり、又セリユリエル Schiller の書誌にも散見してゐる。最も重要な語學文獻としては昭和十年の東京展觀および同十一年の複製によつて、最近日本の學界に紹介されたアイヌ語彙も存する。されば、露西亞系統の新古資料は姑く惜き、シーボルトが手を着けたものは、その實質の價值に於て、前古未曾有と稱すべきであらう。クラブロートが譯出した語彙の陳腐さとは比べものにならなかつた。即ち歐洲におけるアイヌ語學の鼻祖として、シーボルトは是非第一に稱へられなければなら

ないのみならず、シーボルトの言語學上の功績中に於ても、傑出してゐると考ふべきであらう。

之を要するに、シーボルトがその日本民族起源論に於て、日滿兩國語をば比較し、主として單語の點に力を注いだとは云ふものの、名詞のほか、比較は代名詞・數詞・副詞や動詞・助詞にも及び、また支那・朝鮮・滿洲（山丹）・樺太・蝦夷・日本・琉球の七民族にわたつて凡九十有餘の單語の比較表をも製したやうな事があるが、新興比較言語學上の成績は、印歐語比較言語學のそれに比して、方法と共に頗る劣ることは是非もない。最後に日本語學のものについては、蘭國在留の同郷生ホフマンが出藍の譽を擧げたことについても、又シーボルトとホフマンとの關係についても、相當敘述すべきであるが、時日の切迫、紙數の自制、その他の事情のためとあつて、今は遺憾ながらそれらに向つて筆を進める餘裕がない。終に臨んで、私の原稿の非常におくれたのを寛容された入澤博士及び編輯者に對して深甚の謝意を表する。

（昭和十一年十二月）

